

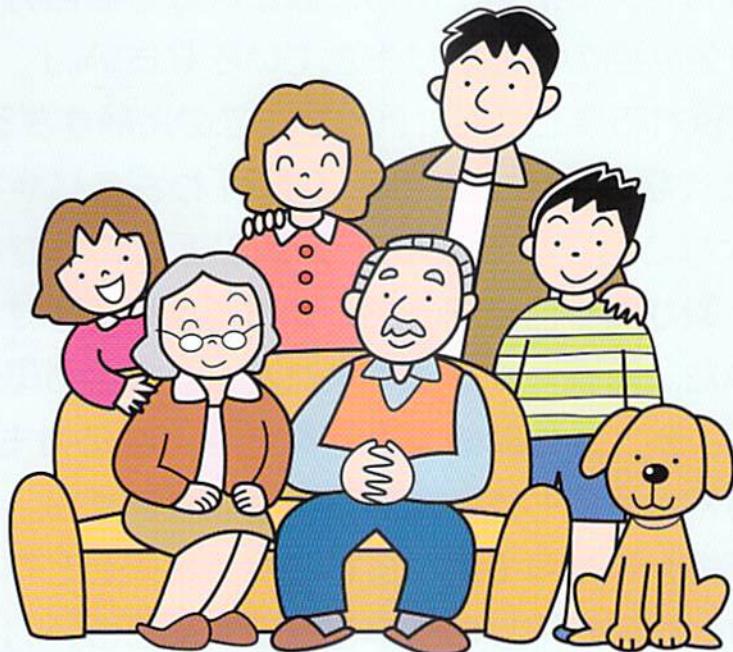
あか 明るいまちづくりをめざして

みんなで一緒に考えよう

第34回全国中学生人権作文コンテスト
内閣総理大臣賞受賞作品

ひがいしゃ かがいしゃ たちば **「被害者と加害者それぞれの立場」**

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催



39号

新宮市教育委員会
新宮市人権尊重委員会

ひがいしゃ かがいしゃ

たちば

「被害者と加害者それぞれの立場」

さだまさし氏の曲に「償い」という有名な作品がある。私が小学生の頃、母が聞かせてくれた話だ。それは、私が過って友人に怪我をさせたことがきっかけだった。遊び中の事故で、決して故意ではなかったが、友人は目のすぐ横を負傷してしまった。



真冬のある日、私が加害者であると連絡を受けた母は、すぐに友人の家族に電話で謝罪し、受診する病院に私を伴って駆けつけた。寒い廊下で、診療が終わるまで直立のまま待っていたところ、母が静かに私を見据えて

「もしA君が視力を失ったら、あんたはこれからは自分のために生きるんじゃない。一生A君の目になり生きていきなさい。」

と、とめどなく流れる涙とともに言った。この冷静すぎる母の態度に、私は全身が冷たくなっていくを感じた。「わざとじゃないのに。まさかこんな重大なことになるなんて。」取り返しのつかないことをしてしまったと、頭が真っ白になった。気付くと母と私は人目もばかならず号泣していた。診察室から出て来た友人と彼のお母さんに、母は「A君は大好きなテニスも諦めなきやならなくなるかもしれません。それどころか日常生活にも支障があるかもしれません。ご両親が今までどれだけの苦労をして育ててこられたか。将来をどれだけ楽しみにしていらしたか。出来る限りの償いをさせてください。」

と、それでもかというほど頭を下げ、謝罪した。私と友人が仲が良いことで、母親同士も仲良く付き合っていたので、まさか母が敬語で謝罪するなんて思いもよらなかった。友人のお母さんは、母に寄り添つて言った。

「幸い眼球は傷つかなかったの。傷跡は残るかもしれないけど、わざとじゃないんだから。洵太君もそんなに泣かないで。」

わたし かた よ けい なみだ で ふ だん ぱなし
と、私の肩もなでてくれた。余計に涙が出てきた。普段バカ話をする
ゆうじん ひだりめ あ だま き
友人の左目にはガーゼが当てられ、黙っている。とても気まずくて、
わたし ほんとう せいいっぱい
私は「本当にごめんなさい。」というのが精一杯だった。

よる はは きたく ちち となり わたし すわ で き ごと せつめい
その夜、母は帰宅した父の隣に私を座らせて、この出来事を説明し
つぐな きょく はなし き
た。そこで「償い」という曲の話を聞かせてくれた。

お こうつう じ こ
“ゆうちゃん”が起こした交通事故で
ひがいだんせい し ぼう かれ まいつききゅうりょうび
被害男性が死亡。彼は毎月給料日にな
ゆうびんきょく はし どうりょう ちょきん
ると郵便局に走る。同僚は「貯金だけ
しゅみ あざわら じつ
が趣味だな。」と嘲笑うが、実はずつ
ひがいしゃ つま そうきん つづ
と被害者の妻に送金を続けていたのだ。
ひ いつつ て がみ とど
ある日ゆうちゃんに一通の手紙が届く。
ひ がいしゃ つま
それは被害者の妻からだった。



じんせい おく か
「そこには、もうあなたの人生を送ってくださいって書いてあったん
とうていゆる わ かあ い
よ。到底許されるわけないと分かっとんやけどね。お母さんが言い
だれ けんり おか けんり ゆうせん
たいのは、誰かの権利を侵してまで、あなたの権利が優先されること
ぜったい こんかい ちゅうう
は絶対ないってことなんよ。今回はわざとじゃなかつた。でも注意を
おこた じ じつ くん しつめい ひっし はたら
怠つたのは事実やろ。もしA君が失明したら、あんたは必死で働いて、
くん ほんらい も み けんり ふっかつ
A君が本来ならば持っていた“見る”という権利を復活させるために
かね じ かん つか がくせい とう かあ
お金と時間を遣いなさい。あんたが学生のうちは、お父さんとお母さ
んが代わる。家族みんなでいろんなことを犠牲にして生きていかない
かん。それが償いたい。」母の言葉に、私は頷くしかなかつた。

よくじつ がっこう ゆうじん かお あ こわ ゆる
翌日は、学校で友人と顔を合わせることが怖かった。許してもらえる
ゆる おも
のか、いや、そもそも許してもらおうなんて思ってはいけないんじ
わたり かれ きのう はなし
やないか。そんな私に彼は「おはよう。昨日はごめんな。」と話かけて
くれたのだ。その時の気持ちは、今でも言葉にできない。胸につか
えていた巨大な黒い何かが、ゴロッと落ちてくれた感じだった。きっと
かれ わたり えんりょ そえん さ なにごと
と彼は、私が遠慮して疎遠になるのを避けてくれたのだろう。何事も
なかつたようにとはいひかないが、自然な対応ができるようになったの
も、その一瞬の彼の気遣いのおかけだったと思う。

しゅうまつ きず かいふく れんらく う わたし りょうしん あらた ゆうじん
週末、ずいぶん傷が回復したと連絡を受け、私と両親は改めて友人

いえ しゃざい い
の家に謝罪に行くことにした。サッカーの練習の後だったので、ユニ
い わたし ちち きが あと
フォームのまま行こうとした私を、父が「着替えろ」と制した。「お
まえ けが れんしゅう やす くん きも かんが
前がさせた怪我のせいで、テニスの練習を休んどるA君の気持ちを考
えろ。」いつもは優しい父が厳しい口調で言った。そうだ、この小さ
きづか つぐな わたし そくざ のこ
な気遣いも償いなのだ。私は即座にユニフォームを脱いだ。
ぬ

ご ゆうじん けが なお きずあと のこ わたしたち
その後、友人の怪我は治り、傷跡もほとんど残らなかった。私達は
し ぼうこう ごうかく はな わたし へ
それぞれの志望校に合格し、離ればなれになってしまったが、私の部
や そつぎょうしき かれ かた く うつ きねんしゃしん かざ
屋には卒業式に彼と肩を組んで写った記念写真が飾ってある。もちろ
たいせつ ゆうじん りゆう じこ たにん けんり おか あく か
ん大切な友人だからという理由だが、あの事故を忘れないようにとい
う意味もある。あの事故は、他人の権利を侵すことの悪と、たとえ過
しつ じぶん かぞく しゅうい ま こ おそ
失であっても、自分だけでなく、家族や周囲まで巻き込んでしまう恐
わたし おし るしさを私に教えてくれた。

さくひん たい かいぜんこくちゅうがくせいじんけんさくぶん ないかくそう り だいじん
この作品は、第34回全国中学生人権作文コンテストで内閣総理大臣
しょう じゅしょう さ が けん さ が けんりつたけ お せいりょうちゅうがっこいちねん ひら き じゅんた
賞を受賞した佐賀県・佐賀県立武雄青陵中学校一年 平木 淳太さんの
さくひん さくしゃ ひら き あやま ゆうじん ふ しょ たいせつ ゆうじん
作品です。作者の平木さんは、誤って友人を負傷させた。大切な友人の
しりょく うしな と かえ
視力を失わせてしまうかもしれない……。取り返しのつかないことをし
たことを友人に詫びる作者と母。幸いにも大事には至らず、友人やその
かぞく ぎやく きづか う なか はは つぐな きょく
家族からは逆に気遣いを受ける。そうした中、母は「償い」という曲の
かた こい た にん けんり おか
エピソードを語る。たとえ故意ではなくとも、他人の権利を侵してしま
うことどれだけ重いものであるか、作者は思いを新たにする。
いちどく ははおや かた し きょく つぐな さくひん
ご一読いただき、母親が語ったさだまさし氏の曲「償い」という作品
はなし ないよう りょうしん きづか さくしゃ おも あら みな
の話の内容、両親の気遣いなどについてふれた作者の思いを、皆さんに
かんが かてい がっこう しづば ち いきとう はな あ
も考えていただき、家庭、学校、職場、地域等で話し合っていただけれ
ば大変ありがとうございます。

しりょう ほう むしょうじんけんよう ごきょく ぜんこくじんけんよう ご い いんれんごうかい じんけんさくぶんしゅう
(資料) 法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会「人権作文集」

さくぶんないよう けんぶん けいさい
※ 作文内容は、原文をそのまま掲載しています。

ひろ ここ おも
広げよう やさしい心と思いやり